

[成果情報名] カワウ飛来一斉調査から推測した山形県における春季と秋季のカワウの分布

[要 約] カワウ飛来一斉調査結果から山形県におけるカワウ分布を把握した結果、年・季節によりカワウの分布と着水羽数変動することがわかった。

[部 署] 山形県内水面水産試験場・資源調査部

[連絡先] TEL 0238-38-3214

[成果区分] 政

[キーワード] カワウ、飛来一斉調査、分布、着水

### [背景・ねらい]

近年、山形県でもカワウの食害により内水面漁業の被害が拡大していると考えられている。このため、山形県内水面漁業協同組合連合会は、被害防除策の基礎資料とするため、春季と秋季にカワウの飛来一斉調査を実施している。この調査結果をとりまとめ、山形県における春季と秋季のカワウの分布を調査した。

### [成果の内容・特徴]

- 1 カワウ飛来一斉調査は、春季は2017年は6月3～5日及び6月17～19日、2018年は6月2～4日及び6月16～18日、秋季は2017年は10月6～9日及び10月14～16日、2018年は10月6～8日及び10月13～15日に実施された。15内水面漁協が漁業被害が大きいと推測される地点及び重要な漁場等を考慮し合計67調査定点を設けた。各定点に配置された調査員が、日の出30分前から2時間程度、調査定点で目視による観察を行い、飛来数（着水、通過を分けて）や飛来方向などを「調査カード」に記録した。なお、2017年からこの方法に変更された。
- 2 記録カードを基に、飛来数と飛来方向を地図上に落とし、着水羽数、通過羽数及び飛来方向を考慮し、その場所周辺の着水羽数を推測した。
- 3 春季はほぼ同時期に実施した2017年6月3～5日、2018年6月2～4日の調査結果を、秋季も同様に2017年10月14～16日、2018年10月13～15日の調査結果を比較した。
- 4 春季（図1）  
2017年に50羽以上の着水があったのは、最上川と置賜野川との合流点付近、寒河江川及び丹生川であった。一方、2018年は寒河江川であった。春季に多くのカワウの着水がみられたのは、営巣地付近であった。
- 5 秋季（図2）  
2017年に50羽以上の飛来があったのは、最上川と置賜野川との合流点付近、寒河江川、寒河江川との合流点付近の最上川、最上小国川との合流点付近の最上川、立谷沢川との合流点より下流の最上川、相沢川との合流点付近の最上川及び赤川であった。2018年は、最上川と置賜野川との合流点付近、上郷ダム付近、寒河江川及び立谷沢川との合流点より下流の最上川であった。
- 6 年・季節により分布と着水羽数変動していた。置賜野川との合流点と寒河江川には、年・季節を問わず多くのカワウがみられた。一方、秋季は、春季にはほとんど着水が確認できない最上川の下流で多くのカワウがみられた。

### [成果の活用面・留意点]

- 1 効果的な被害防除策を検討するため、モニタリングを継続しカワウの分布を年毎・季節毎に把握しておく必要がある。
- 2 県内全河川における調査では無いため、調査した河川以外にもカワウは分布していると思われる。
- 3 早朝の調査のため濃霧の場合があり、確認できなかったカワウもいると思われる。
- 4 春季はアユの放流時期、秋季はアユの降河時期であるため、カワウの分布はその状況に左右される可能性がある。
- 5 春季に営巣地が確認できていない場所周辺で着水していたカワウがいた場所の周辺に確認できていない営巣地がある可能性がある。このような場所の周辺を注意深く見回る必要がある。

[具体的なデータ]

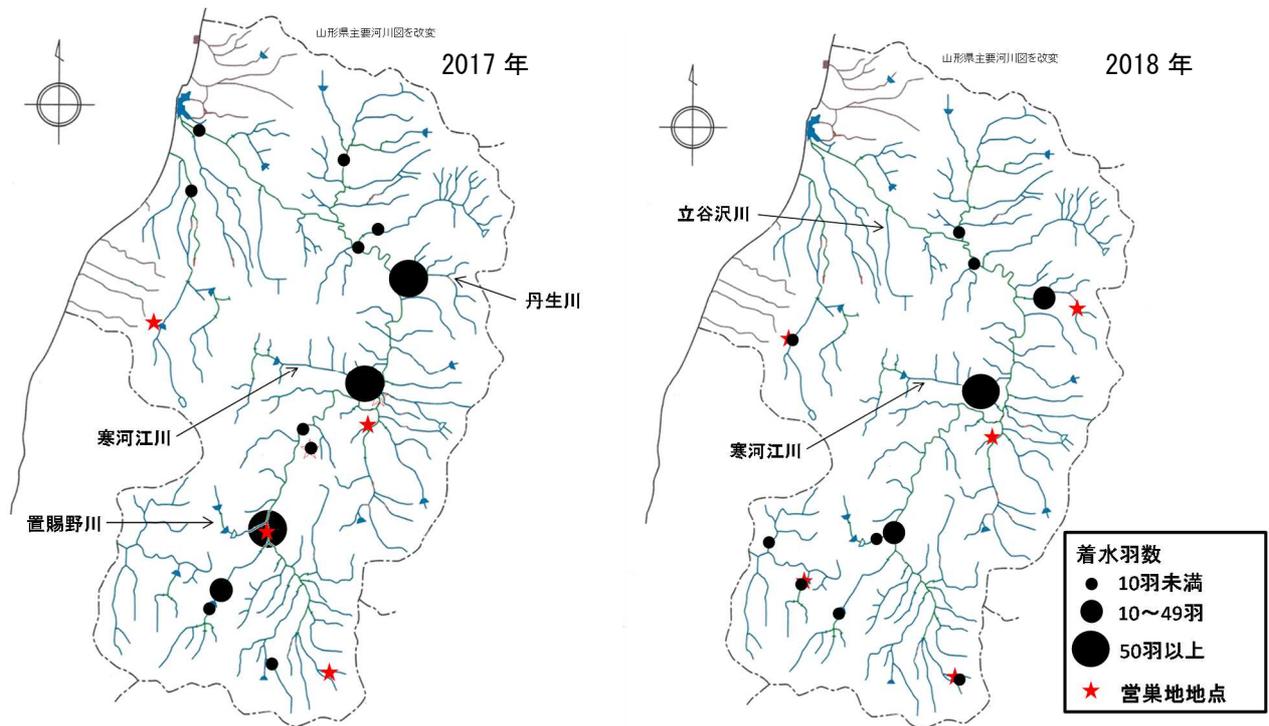


図1 カワウ飛来一斉調査結果から推測した山形県における春季のカワウの分布

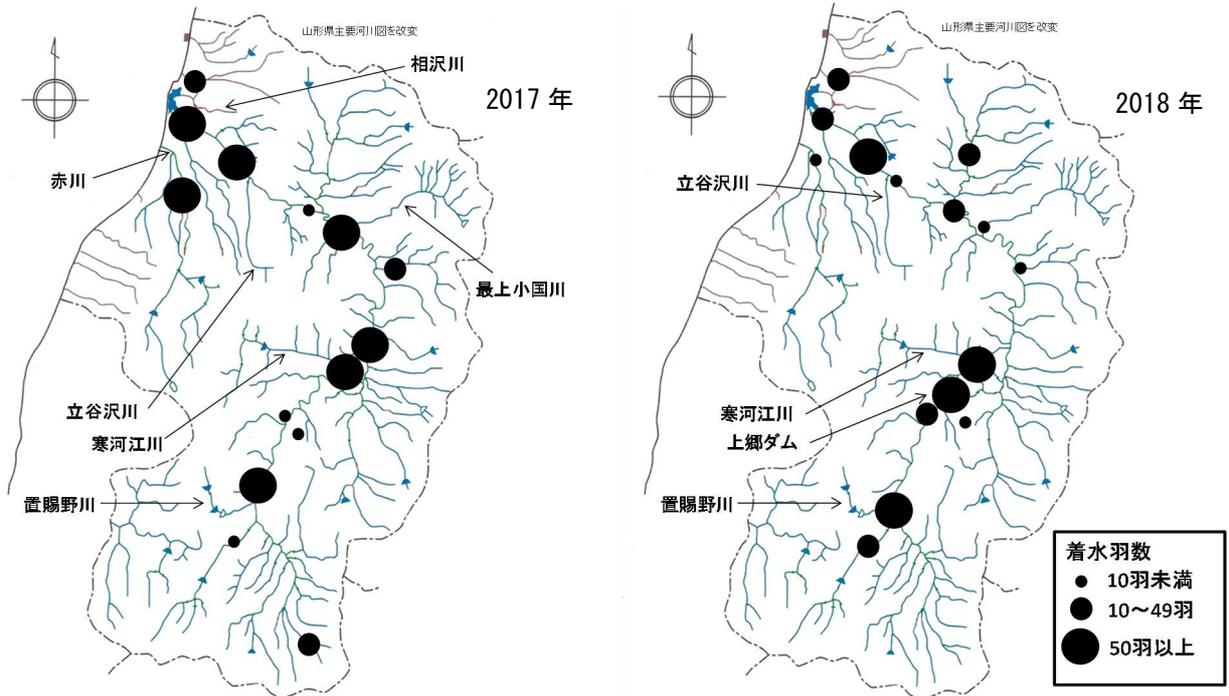


図2 カワウ飛来一斉調査結果から推測した山形県における秋季のカワウの分布

[その他]

研究課題名：カワウ・外来魚等対策事業

予算区分：県単

研究期間：令和元年度（平成29年度～令和元年度）

研究担当者：河内正行、山形県内水面漁業協同組合連合会

発表論文等：なし